所員紹介 ── 私の考える地球環境問題と未来

困難をしなやかに生き抜く
ハイブリットな方法論の可能性

村尾るみこ
（研究員）

2020年より、世界は新型コロナウイルス感染症の拡大にゆらいでいます。ミクロレベルの地域研究・人類学を専門に、難民でもある農民の社会文化的背景をおもにフィールドワークによって明らかにしてきた私には、新しい挑戦がはじまりました。フィールドワークができない、いつ再開できるかわからない状況がつづいているからです。

フィールドワークを工夫し、農民の行動を理解する経験

人類学的なフィールドワークでは、寝食をともにして、人びとの行動に徹底的に寄り添います。これができない状況は、じつはまったく初めてではありません。アフリカのある農村で調査を開始して6年くらいたったときのことです。同じ民族集団を追いかけて、初めて難民定住地でフィールドワークをしました。焼畑で林を「焼く」ことにかかわる農民の意識や資源の再配分等をつぶさに記録しつづけていた当時の私にとって、同じ民族集団でも難民定住地に住む人たちはどれほど異なるのかを比較考察し、「難民」と「農民」の境界があるのかを知りたかったためです。

それまで農村でなにを遮られるでもなく調査できていましたが、あたりまえのことながら、難民定住地では同地のルールに従い難民の家に住み込みができないまま、国連のゲストハウスから「通い」で調査をしました。そのときの心もとなさは鮮明に記憶しています。農村での経験を思い返し、私がゲストハウスに去ったのちの彼らの行動は、翌日の昼間に徹底的に聞き取りました。それぞれが家でしていたことを、ゴザや食器、桶などを持ち出して、再現までしてもらいました。そのように試行錯誤して、足しげく通い「インタビューだけでは帰らないジンルイガクの研究者」である私に心を開いてもらい、収支、親族関係や国籍による土地や食料再分配の実態などは把握するようになっていきました。

平和になるのを待ち、チャンスを逃さない

フィールドにさえ行けなかったこともあります。ザンビアの農村や難民定住地に住んでいる難民たちは、故郷であるアンゴラが停戦をむかえると帰還をはじめました。私も彼らの故郷へ行ける。そう思いながら、現地が調査のできる平和的状況になるまでさらに10年が経過しました。アンゴラ東部農村で調査を開始できたときには、同地が紛争のため人類学的調査の実績のない地域であったため、それまで各地で収集した文献やザンビアでの研究、フィールドワークの経験などがなによりの基盤になりました。

そうして見えたのは、人類学的な難民研究でいわれる「境界性」や「難民性」であり、同時にアフリカ農民の今日的な姿でもあります。過酷な自然や、厳しい政治社会的な状況に生きる農民らが、焼畑で自給する作物を武器にしなやかに生き抜く。その姿勢が生まれる社会文化的背景は、紛争という災いで消失したようにも見えますが、彼らがみずからの社会を再生しようとするさまざまな局面で欠かせないものとして出現することがあります。それを掴むために、手がかりになることはなんでも調査に取り込んできました。

緑の革命とグローバル化、そしてコロナ禍

私が所属するAakashプロジェクトがおもにフィールドワークの対象とするのは、インド北西部、パンジャーブ州の農民です。かつて

インドと調査地の位置。赤い塗りつぶし箇所がパンジャーブ州

インド・パキスタンの分離独立時に大量の難民となって流入した、彼ら難民が、食料増産をめざした緑の革命を担う、成功した農民となりました。その「農民」も、グローバル化のなかでさまざまな人びとと共生し、社会の変化に対応しつつ、法改正もあいまって、大量に残る稲わらを焼くようになりました。

この稲わらの管理に関する社会文化的側面を探ることは、人類学的な考察だけでなく、複数の学術領域からの知見も必要です。私がかつて学んだ農学や、座学で得た複数の学術領域の知識のほか、フィールドワーク、共同研究や社会活動で培った経験以外にも、なにか活かせることはないかと思いを巡らします。

これまでのところ、Aakashプロジェクトではオンラインでの情報交換をインドの共同研究者と重ねています。もちろん、寝食を共にするフィールドワークで得られるものとは異なってしまいます。しかし、この状況での人類学的研究の可能性は世界中で見直されており、インド研究でもそのような論考が出ています。その可能性に私たちもかけるなら、コロナ禍は、「オンラインとフィールドワークのハイブリット」という新しい方法論的追い風をもたらし、インド北西部の現実をより鮮明に照らそうとしているのかもしれません。

むらお・るみこ
■略歴　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科単位取得退学。博士（地域研究）。日本学術振興会特別研究員などを経て、現職。外務省対アンゴラ国ＯＤＡ政策評価アドバイザーなど社会貢献活動にも従事。
■専門分野　地域研究、人類学
■趣味　華道

■リーダーからひとこと
林田佐智子（教授）
Aakashプロジェクト開始早々、世界中で移動が制限され、村尾さんの学術的な活動にとってむずかしい状況がつづいていることは理解しています。同じことは、村尾さんと私の関係構築にもあてはまります。いっしょに旅をして、お酒を飲んで、分野のちがいや価値観を超えて語りあうはずが、いまはご飯もいっしょに食べられない。これは悔しい。せめていっしょにヨガしない？